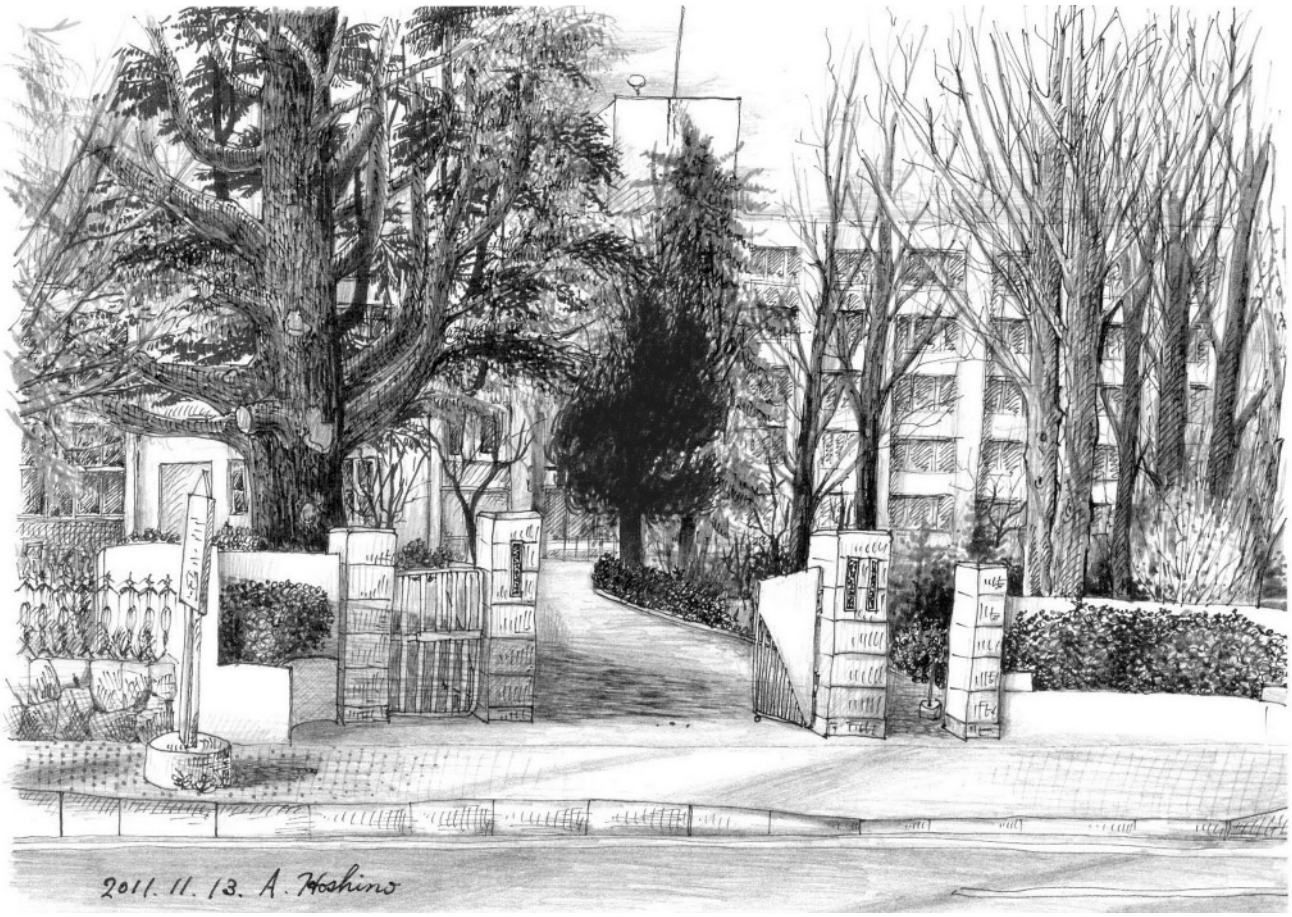
群馬大学医学部 刀城クラブ会報

編　集　発　行
群馬大学医学部同窓会
発行責任者　森川　昭廣
編集責任者　福田　利夫
〒371-8511
前橋市昭和町三丁目39－22
電話027-220-7861(ダイヤルイン)
FAX(電話兼用)027-235-1470

刀城クラブホームページ http://tojowww.dept.med.gunma-u.ac.jp/　同窓会事務局メールアドレス tojoclub@showa.gunma-u.ac.jp



医 学 部 正 門

目　次

卒業おめでとう　同窓会長　森川　昭廣…2
平成23年度 卒業生名簿……3
新任教授紹介
分子予防医学　教授　磯村　寛樹…4
母校に望む㊹
前橋赤十字病院　院長　宮崎　瑞穂…5
水芭蕉㉟　弥生病院眼科　渡辺のり子…6
田所作太郎先生の偉業を称える
元同窓会長　箕輪　真一…7
会員の著書リスト……7
書評　麻酔神経科学　齋藤　繁…8
パジャジャラン大学学生歓迎会
公衆衛生学　教授　小山　洋…9
名簿編集委員会からのお知らせ……9
学会報告（同窓会補助）
病理診断学　教授　小山　徹也…10
神経薬理学　教授　白尾　智明…10
応用生理学　教授　鯉淵　典之…11
分子細胞生物学　教授　石崎　泰樹…11
支部だより……12～13
クラス会だより……13～16
地域医療貢献賞お詫び……16
医学部代表者及び新任教授との合同懇談会
幹事長　岡田　恭典…17
同窓会財政基盤強化協賛金について……18～19
太平義塾学生寮発足……20～21
役員会だより……22
学内・学外人事……22
謹　告……22
編集後記……22

卒業おめでとう、そして「つながり」を未来に

医学部同窓会・刀城クラブ
会長　森川　昭廣（昭44卒）

卒業生の皆さん、御卒業おめでとうございます。また御家族の方々のお慶びもいかばかりかと存じます。卒業後の新たな人生でも皆さんの目覚ましい活躍を心からお祈り致します。皆さんにはあっという間の４年間または６年間だったでしょうか、それとも長い年月だったでしょうか。卒業後はこの間に身につけた知識、経験そして友情を土台にして「つながり」をもって大きく未来へはばたいていただくことを期待しています。特に東北６県や茨城御出身の方にはこの１年大変な思いをされた方も多いと思います。どうぞ健康に留意され活躍されることをお祈り致します。

さて、今年群馬大学医学部同窓会・刀城クラブは発足して60年を迎えます。人間なら還暦を迎えるところです。60年前に皆さんの先輩がまだ戦後から７～８年の混乱した中、母校への熱い気持ちをもって同窓会・刀城クラブを設立されました。まだ卒業生が500人にも満たない時代に将来の卒業生の「つながり」を考えて設立していただいたものと思います。しかし、今や同窓会会員は6000人に近づき、全国のみならず外国で活躍していらっしゃる方も多数いる時代になりました。これから会員の「つながり」をより強固にすべく同窓会・刀城クラブはホームページのリニューアルと会報の充実を目指しています。前者は事務局員と白倉教授を始めとする広報委員会が、後者は福田教授を先頭に会報編集委員会が忙しい中、夜遅くまでボランティアとして同窓会員のために熱意をもって作業を行っております。どうぞ訪問してその充実ぶりをご覧下さい。これらはなかなか母校を訪問できない方々にも大学との「つながり」、クラスメートや先輩・後輩との「つながり」に大きな役割を果すものと確信しています。

皆さんが卒業後どこに行かれようと必ず各県には皆さんの先輩がおられます。そして皆さんのバックには群馬大学医学部があり、そして会員組織である医学部同窓会刀城クラブがあります。そこから発信される情報は人の結び付きをより強固なものにします。この地での「つながり」こそ皆さんの大きな財産になるはずです。研修現場の上司のみならず、同期生やクラブの先輩さらには同窓会の先輩へのアドバイスを求めることが、皆さんをブラッシュアップする大きな力になると信じます。どうぞ同窓会を大きな情報源として活用され、一方で未来に卒業してくる後輩にも温かい視線をおくってください。

学位記伝達式後の集合写真（平成24年３月22日、基礎棟前にて）

新任教授紹介

着任の御挨拶

分子予防医学
教授　**磯村　寛樹**（特別会員）

この度、群馬大学大学院医学系研究科生体防御機構学分子予防医学分野の教授を拝命致しました。今回群馬大学医学部同窓会のご高配により、刀城クラブ会報でご挨拶申し上げる機会を頂きました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

私は愛知県の出身（昭和41年６月生まれ）で愛知県内の私立高校を卒業後、岡山大学医学部に入学し、卒業後（平成４年）岡山大学小児科学講座で小児科研修を開始しました。その時、研修病院（松山赤十字病院）で受け持たせて頂いた神経芽細胞種の患児に対し、他の先生方と共に末梢血幹細胞移植を行ないましたが、移植後なかなか造血能が回復しません。もちろん、その当時のかけだしの研修医が考えたことなど全くの的外れであったに違いありませんが、その時には充分な量の造血前駆細胞を移植してもなかなか造血能が回復しないのは、ひょっとしたら体内に潜伏しているヘルペスウイルスが免疫不全状態で再活性化してきて、造血前駆細胞の正常な増殖や分化を妨げているからではないのかと勝手に考えてしまいました。そして、研修終了後にもそのことが忘れられない私は、ヘルペスウイルス学が専門の岡山大学ウイルス学講座（新居志郎教授）に押し掛けて、その当時助教授であった山田雅夫先生（現教授）にヘルペスウイルスの培養法を教えて頂き、造血前駆細胞の培養法は内科の同級生に教えてもらいつつ、in vitroで実際に小児の突発性発疹の原因ウイルスであるヘルペスウイルス６型が造血前駆細胞の増殖を抑制するかどうかを調べ始めました。そこで研究の楽しさに目覚め、平成９年、岡山大学ウイルス学講座の助手に採用して頂き、基礎研究者への道（？）を開始致しました。

ところが助手に採用されても、本格的な基礎ウイルス学を勉強したことの無い私にはウイルス学はちんぷんかんぷんで右も左もわかりません。とりあえず、同僚の助手と共にウイルス学学生実習を受け持ちつつ、最新のJournal of Virologyに掲載されたヘルペスウイルスの全論文の内容を手分けしてお互いに説明し合い、関連のことを教科書で調べていくといったことから始めて、なんとかとっかかりをつくっていきました。しかしいざ実験を始めるとなると、今度は実際の実験手技がわかりません。そんな時、丁度ドイツ留学から帰国された大内礼子先生（大内正信川崎医科大学教授の奥様）がウイルス学の助手として赴任され、大内先生に毎日実験ノートを見て頂きながら、分子生物学の基礎を教えて頂きました。

そんな方法でなんとか学位を取得し、平成13年、ヒトサイトメガロウイルス基礎研究の父であるDr. Stinski（アイオワ大学医学部微生物学講座教授）の研究室に留学させて頂く機会を得て、サイトメガロウイルス研究を本格的に開始しました。そして、平成15年には愛知県がんセンター研究所、腫瘍ウイルス学部の鶴見達也部長からお誘い頂き、主任研究員（平成19年からは室長）として比較的独立した立場で、ヒトサイトメガロウイルスの基礎研究を継続させて頂きました。

ヒトサイトウイルスはウイルスの中ではゲノムサイズが240kbpと大きいことからこれまで遺伝子組換えウイルスを作成して実際の感染細胞でウイルス遺伝子の役割を調べることが困難でした。しかし、ドイツのグループがヒトサイトメガロウイルス（HCMV）の全ゲノムをBAC（bacterial artificial chromosome）にクローニングしたことにより、大腸菌の中で相同組換え法を用いて組換えウイルスゲノムを作成し、改変したウイルスゲノムを大腸菌で増やして、増やしたウイルスゲノムを細胞に遺伝子導入して組換えウイルスを迅速に作成する方法を私達は独自に開発致しました。現在、原因不明の難聴の小児の中には先天性サイトメガロウイルス感染症がその原因である例が20％程度存在することが、米国および日本でのレトロスペクティブな調査から分かってきていますし、造血幹細胞移植や臓器移植後にHCMVが再活性化し、ガンシクロビル投与を中止した後に、再度活性化してきて、“late onset HCMV desease”をおこす例が多く存在し、大きな問題となっています。また、HAART法によるHIV感染者の長期生存により、今後ますます日和見感染症であるHCMV感染によるHIV感染の拡大、AIDS発症・重症化が大きな問題となってくることが予想されます。それらの事象に対し、基礎ウイルス学の立場から体内で増殖しない安全なHCMVワクチンの作成などを行なっていくことで、少しでもヒトの健康に貢献して行きたいと考えています。

最後になりましたが、伝統ある群馬大学医学部の一員に加えて頂いたことを誇りに思うと共に、身が引き締まる思いです。誠に微力ではありますが、少しでも群馬大学医学部の発展のために貢献できるように一生懸命がんばりたいと思いますので、今後とも同窓会の先生方におかれましては、ご指導、ご鞭撻のほど何卒よろしくお願い申し上げます。

母校に望む ㊹

多様性のある人材の育成を

前橋赤十字病院
院長　宮﨑　瑞穂（昭45卒）

「母校に望む」は難しいテーマです。立場によって変わるし、そのときの状況によっても変化します。

同窓会員として思うのは、大学は我々の母校として、いつも誇りに出来る輝かしい存在であって欲しいということです。それにはやはり世界に通用する研究成果を上げていただくことでしょうか。これは大学で頑張っていただくしかありません。

もう一つは大学に多様性のある人材が育つ風土を作って欲しいと思っています。

私は昭和45年に群馬大学医学部を卒業して脳神経外科医局に入局し、昭和58年に前橋赤十字病院に赴任しました。そして日常診療の他、救急診療体制の確立に務めましたが、そのときに感じたことは群馬県に救急専門医など横断的な視点を持つ医師が少ないことでした。これは群馬県では伝統がある群馬大学が一手に医師の養成と派遣を行っているためか、講座がない救急科などの医師養成が行われず、その発展が遅れたのではないかと思います。さらに総合診療や緩和医療などの従来の科の枠を超えて、安全管理やチーム医療など横断的な仕事にとって広い視点や興味を持つ医師が少ないと感じました。おそらく、大学では、かつてはそのような意識を持った医師が評価されにくかったからではないかと推測していますが、いかがでしょうか。

我々のような一般病院では、効率よく患者さんに満足していただく努力が必要と思っていますが、それには医療人が協調して働くことが求められています。そして感染症、医療安全、緩和医療や、NST、総合診療医、チーム医療など多様性があり人間全体に興味のある広い視点を持った人材が必要と思います。その点では医師としてはいわゆる「医学者」より「医者」が必要ですが、それらの医師が勉強や研究を志した時には快く受け入れていただければと思いますし、最近の若い人はいろいろな価値観を持ち自分で考える人も増えています。様々な価値観を尊重し、多様性を持った人材を受け入れる度量、言い換えればオープンマインドな風土を期待しています。

一方、私は群大関連であり医師不足で悩み多い病院の長として管理をしている立場ですから、まずは医師の派遣をしっかりお願いしたいことが偽らざるところです。これは私に限らず県内の多くの病院長が切実に感じていることで、そのために研究や教育、臨床のバランスが取れて多くの医師が集まる大学になって欲しいと思います。基礎研究や医学生教育などは大部分が大学でしか行えませんし、診療においても多くの病院を傘下に抱えている大学が、各病院で診療に難渋する症例を研究的な側面を踏まえながら診ていただくこともお願いしたいことです。さらには群馬県唯一の医大として、県内医療の中心としての責任を発揮していただければと思います。我々も協力は惜しみませんが、現状では大学といえども採算性の面から通常の診療にも力を注がなくてはならないことは本当にご苦労なこととお察しします。しっかりした評価は必要としても、研究費などもっと大学に国費を投入すべきと思っています。

また一般病院は、診療を通して実践的な医師の育成の一端を担っています。その点から診療、教育などの面で大学との密接な連携体制や人材の交流が活発になることを望んでいます。病院経営上困ることは医学者としてではなく医者としての教育が不足している医師が多いことです。当院では他の病院と同じく医療安全、臨床研修指導医、チーム医療、連携体制などに力を入れ教育しています。しかし折角教育しても多くの医師がローテイトで入れ替わるのでいつの間にか教育効果が薄くなってしまうことが悩みです。かといって若い医師に一カ所に長く居ていただくことは、本人の成長の面からマイナス面もありますので、関連病院の中で、これらの研修を同一の基準で行えるような体制があれば、医師が異動したときも病院のレベルは維持できるので助かります。接遇や説明などは昔に比べずっと良くなっており、患者さんとのトラブルも一部の医師を除いてずいぶん少なくなっているので、これは大学の教育のお陰と感謝しています。

勝手なことばかり書きましたが同窓生として上にも記したとおり母校を想う気持ちから出たことですので、ご容赦下さい。

女性医師シリーズ　㉟

上州と三州

弥生病院眼科
渡辺のり子（昭31卒）

1932年(昭和７年)２月11日生まれは、第二次世界大戦（太平洋戦争）の中で育ち、1944年10月からは勤労学徒として豊川海軍工廠で働き、1945年８月７日米軍の爆撃で８人の学友を失った軍国少女でした。国民学校から高等女学校に入学し卒業は新制高等学校（男女共学）でした。更に私は日本女子大学家政理科に入学し、1952年４月上州の地に来ました。雷・空っ風とかかあ天下の乾繭の街前橋と三州の豊橋乾繭とは通ずる所があり、最初の下宿は偶然にも豊橋出身の繭屋さんでした。

一学年48人中女子生徒が５人いるのは珍しく、法医学教授には頭を使わぬ者が５人もいると評され、当時の世間的常識に反していたのかと思いました。後に眼科入局時にも子連れを雇うくらいなら跛を雇うと言われ国家公務員給料をいただくとはこう云うことかと、現在では考えられない男尊女卑の時代で、奮起を促されました。

校舎は木造でしたが、山が美しく、雪山でのスキーにも誘ってもらい、初めての雪山をまろびまろびころげ落ちたことも素晴らしい思い出です。授業は階段教室で行われることが多く、ミクロの伊東俊夫教授の素晴らしいドイツ語の板書に魅せられました。後に病理の大根田玄寿教授からは英語となり戸惑ったものです。各講義が終るごとに試験委員が教授と話し合い、再試験者が出ないように協力しあいました。

４年間は瞬く間に過ぎ、２ヶ月に渡る臨床全科の卒業試験がすみ３月の卒業式には母と雪の赤城山に登り上州の地から暫く別れました。

８人の子供の教育費等に孤軍奮闘していた父が昭和30年12月十二指腸潰瘍で千葉大学の中山教授の手術を受けることになりました。卒業試験真っ最中に、急遽自家の眼科診療に携わるべく帰豊しました。仁田正雄助教授のきびしい臨床実習で眼底はなんとか視神経乳頭がみえるものの、一日200～300人の外来は凄惨なものでした。仁田「眼科学」を座右に、患者さんに指導されての３年間でした。１年間の国立病院のインターン、国家試験があり、昭和32年７月16日付けの医師免許証を持ちました。

上州と三州とを行き来しながら昭和34年６月結婚し、35年５月長男、36年12月二男、40年１月長女を出産し42年４月豊橋におちつきました。

９年間の医局生活は、きびしい仁田助教授の試練で白内障手術（嚢内摘出、嚢外摘出で無縫合時代）網膜剥離手術、緑内障診療など眼科医の基礎をしっかりつけて頂き、博士号も頂きました。

育児は大学病院の近くに一軒家を借りお手伝いの小母さんは二人頼み、３～６ヶ月間は母乳を与えました。学会発表前に論文を書く時は、自分も不機嫌・娘も不機嫌で夜泣きが多く背中にくくって何とかやりすごしました。

昭和52年12月東北大眼科医局に居た兄がやっと帰豊。53年１月から６ヶ月愛知県総合保健センター眼科で斜視・緑内障の研修に通い、53年７月１日眼科診療所を豊橋南部に開業し、やっと一国一城の主となりました。昭和55年整形外科・脳神経外科・理学診療科を加え、86床の病院を開設しました。58年から内科医を招聘し60年から130床に増床し、広域第二次救急医療にも参加することとなり、院内に保育所と職員寮も作り、160人の職員に対処しました。現在は長男が内科・三男が眼科で働いています。

仕事の合間をぬい、昭和58年２月には東三河在職の50人の女医さんたちと東三女医懇話会を設立し、年１～２回の研修会（文化面の）と桟関誌「如月」がつづきます。

又同時に専門職を持つ35人の女性を集め国際ソロプチミスト豊橋を立ちあげ、来年は創立30周年の記念行事の実行委員長をつとめます。

平成６年６月、旧制豊橋市立高等女学校時代、豊川海軍工廠で戦死した学友の50回忌法要を豊川稲荷で行い戦後に区切りをつけました。

明治35年創立の豊橋高女の創立100周年記念事業のため、平成10年より同窓会長を受けて８年余、３万余名の同窓生を持つ県立豊橋東高校の同窓会と楽しい時間を持ちました。

国際平和医療団ペシャワール会の中村哲先生にお会いし、誰も行かない所へ行き医療をすると云う暖かい鉄の意志に感動し東三河で講演会・写真展を開きました。

33年間市内の小学校５校・中学校２校の眼科校医をつづけ、豊橋教育賞を受けました。又視覚障がい者就労支援・豊橋市民成年後見センターも援助しています。傘寿を過ぎましたが生涯現役でいたいと思う今日この頃です。

田所作太郎先生の偉業を称える

元同窓会長　**箕輪　真一**（昭28卒）

平成23年９月25日、田所作太郎先生は忽如として逝去されました。享年84歳。母校と同窓会を熱烈に愛し、卓越したパイオニヤ精神で活躍された故人を偲び、まさに“巨星墜つ”の感を深くし、断腸の思いでなりません。

顧みれば昭和63年の健康医学振興会の会議で、常務理事の私が、同窓生の分担執筆による一般向けの「医学知識の普及」の著書発行を提案し、それが実施されることになり、編集委員長に田所先生、副に私がなりました。

目次（章、項）、執筆者、原稿依頼、校正などの編集作業のため、私は田所研究室に何回ともなく訪れ、遂に平成元年に健康医学ガイドNo.1『主治医のアドバイス』を上毛新聞から発刊することが出来ました。これが私が田所先生と親交をより深めた発端でした。

平成３年発行の田所教授退官記念『行動分析学部門業績集』に先生の溢れる足跡が凝集されています。門外漢の私にはその内容に触れる資格はありませんが、私がここで感銘し、強調したいことは、**田所先生の定年退官後の比類ない広範囲にわたる社会活動です。**

先生は平成４年に退官され、翌年には県立医療短期大学学長に就任し、６年間在職し、続いて家庭裁判所健康管理医、老人保健施設医を勤め、さらに自宅の診療所の仕事まで続けられました。この間20年足らずの期間に、多方面にわたる一般向けの著書の発刊を続けられ、これまで私が先生から直接に恵与された著書は次の11冊に及びます（写真）。

田所先生著書（退官後、年次順）

①『こころとくすり』、199頁、星和書店、平５
②『ぐんまの薬草と毒草』、203頁、上毛新聞、平６
③『麻薬と覚せい剤―薬物乱用のいろいろ―』、215頁、星和書店、平10
④『毒と薬と人生』、181頁、上毛新聞、平10
⑤『癒しと看護の心』、260頁、学会出版、平11
⑥『医療と人間行動学』、180頁、協同医書、平13
⑦『美しい花にも毒がある』、246頁、上毛新聞、平成14.３
⑧『改訂増補版、美しい花にも毒がある』、314頁、上毛新聞、平14.12
⑨『快食、快便、快眠の行動学―生活習慣病と薬物―』、223頁、協同医書、平17
⑩『医者だって病気になる』、191頁、悠飛社、平20
⑪『酒とタバコの話』、217頁、上毛新聞、平21

以上

幾多の要職と役職にあり、多忙な生活の中で、このような多数の著書を出版された英才とエネルギーは驚異的です。これら全著書に一貫している信念は「社会の安寧と人々の健康と幸せのため」であり、医学者としての卓見を遺憾なく発揮しています。このことは田所先生が生涯にわたって、意欲的に社会のために尽力し、われわれ同窓生に医の倫理の規範を身を以って諭された人物として、高く評価し、心から賞賛する次第です。

会員の著書リスト（前号222号以降の追加分）

姓名(敬称略)	卒年	書　名	著　者　等（全員）	出 版 社 名	定価(税込)
辻村　啓	昭24	感染症と微生物	著：辻村　啓	ルネッサンス・アイ	1,575
後藤　文夫	昭42	超高齢者医療の現場から「終の住処」診療記	著：後藤文夫	中公新書	819

書評

『超高齢者医療の現場から「終の住処」診療記
―すこやかに老いるために　老いと死を見守ってきた病院長からのメッセージ―』

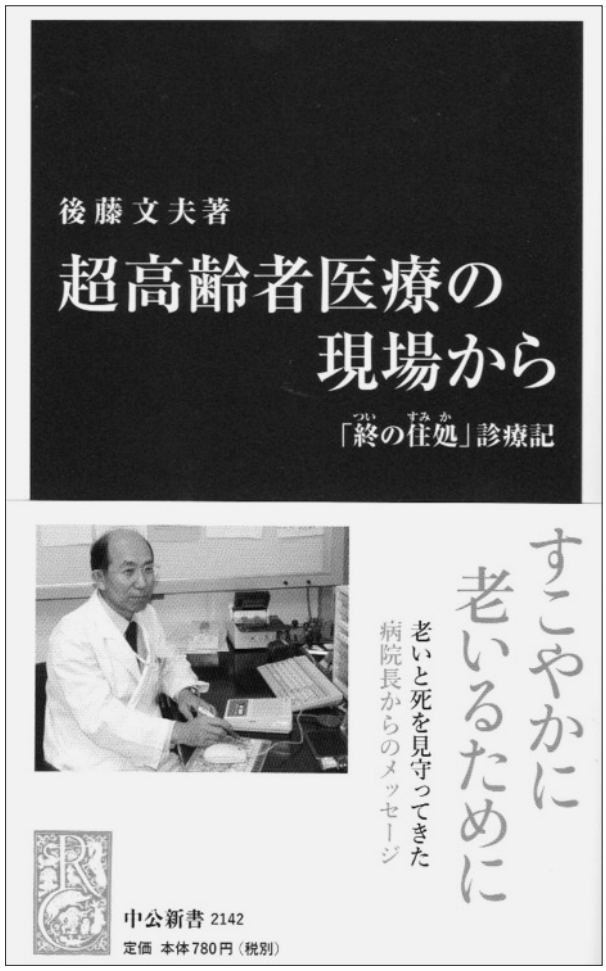
（後藤文夫著・中公新書）

麻酔神経科学
教授　齋藤　　繁（昭61卒）

2011年12月20日、中央公論社から私の前任者、後藤文夫名誉教授が２冊目の中公新書を発刊されました。後藤先生が書かれる一般書としては４冊目となります。疼痛の最新治療を一般向けに解説された「医原性疼痛（主婦の友社）」、「痛みの治療（中央公論社）」、文人の著作と疾患の関係を解説された「漱石・子規の病を読む（上毛新聞社）」がこれまでのご著書です。今回は高齢者医療をテーマに取り上げられ、群馬大学ご退任後、院長としてご勤務中の福島県社会福祉事業団太陽の国病院でのご経験をもとに執筆されています。高齢者の福祉、医療、介護は日本の社会問題の筆頭にあげられており、これを主題とした書籍は新書版だけでも枚挙にいとまがないほどです。しかし、それらのほとんどは、いわゆる評論家や社会学者、経済学者によって執筆されており、高齢者ご本人やその家族と、直接生き死にの問題でやりとりしている人によって書かれていません。本書のサブタイトルにある通り、本書の内容は診療を担当した医師にしか書けないものであり、現場の息遣いが手に取るように分かる記述になっています。

冒頭、「はじめに」の章は、高齢者の現状に関する統計と様々な医療介護システムの解説から始まります。その後の11章では、後藤先生が診療した個別の症例の紹介を基に、高齢者医療が直面している個々の問題が細かく解説されています。症例提示のそれぞれは、仮名で紹介されていますが、その内容は厳しい現場を切り抜けた当事者にしか書けない気迫のこもった内容となっています。紹介されている各高齢者やその家族も、顔が思い浮かぶような臨場感をもって描写されています。症例の解説の中には、医師にしか書けない最新の医学的解説も随所にさりげなく散りばめられています。各章のテーマそのものは敢えてここで紹介しませんが、ドキュメンタリータッチで記述された臨場感あふれる展開は、推理小説のように読者を引き付ける力があり、232ページの全章をあっという間に読み終えてしまうこと請け合いです。

最終章は、「超高齢期を前向きに生きて呆けの進行を遅らせよう」となっており、後藤先生ご自身が長年実行しておられる健康管理法も紹介されています。この本を読んだ読者の多くが、その日から、ここに提案された養生法を実践することに期待したいと思います。



中央公論新社（中公新書）
初版発行日　2011/12/20
定価　819円（本体780円）
ISBNコード　ISBN978-4-12-102142-7

パジャジャラン大学学生歓迎会

公衆衛生学
教授　小山　　洋（昭56卒）
（国際交流パジャジャラン大学担当）

群馬大学国際交流委員会の事業として例年実施されているインドネシア・パジャジャラン大学医学部との学生交換交流プログラムに基づき、パジャジャラン大学医学部学生マリオ（Mario Budi Roehimat）君、タリ（Lestari Putri）さん、リカ（Rika Haeriyah）さん、ハニー（Hanny Rosyida Arisna）さんの４名が2011年12月12日から16日までの１週間に亘って昭和キャンパスを訪れ、附属病院での実習や学生討論会などを通じて群馬大学医学部学生および教官との交流を深めた。また、今回は、パジャジャラン大学側からデニー（Dr. Deni Sunjaya）先生とデウィ（Dr. Dewi Herawati）先生も来学され、修士課程におけるリンケージプログラムについての話し合いが和泉医学系研究科長および鯉淵生命医科学教務委員長との間で行われた。

群馬大学側代表学生は、本学５年生の狩野さん、ホー（HOO CHIN KHAN）君、藤田さん、前原さんの４名で、実習スケジュールの手配から滞在中のホームスティなどのお世話をし、交流を深めた。

この学生交換交流プログラムは1996年の両大学間の姉妹校提携に基づくもので、学生交換交流は鈴木庄亮名誉教授のご尽力により1998年から開始され、今年度で14回目である。この間、同窓会からも山中前会長や森川会長がパジャジャラン大学を訪れ、両校同窓会どうしの交流も進められている。

群馬大学医学部同窓会では、12月15日（木）に石井ホールにおいて同窓会主催の歓迎会を開催した。森川会長の歓迎のあいさつの後、パジャジャラン大学学生によりインドネシアの伝統的な舞踊が披露され、大変、華やかな会となった。国際交流に興味を持つ多くの群馬大学医学部学生が参加し、学生どうしでの意見交換や情報交換が活発に行われた。パジャジャラン大学の学生は４名とも群馬大学医学部に対して大変好印象を持ってくれたようで、卒業後はぜひ群馬大学の大学院に進みたいとのことであった。とても有意義な歓迎会で、両校学生、教官および同窓会員にとって楽しい交流の場となった。

パジャジャラン大学からの訪問学生歓迎会（平成23年12月15日　石井ホール）
左より、リカ、タリ、小山、マリオ、ハニー

名簿編集委員会からのお知らせ

平成24年は３年ごとに編集される同窓会会員名簿発行の年に当たります。昨年12月に平成24年名簿編集委員会が組織され、編集作業が進められています。４月に、現住所や勤務先などの異動状況をお尋ねする調査票を会員各位に発送いたします。個人情報の管理には十分注意し、会員同士の親睦や同窓会の発展に役立つ名簿を作成したいと考えています。調査票が届きましたら、５月10日までにご返送いただきますよう、会員各位のご協力をよろしくお願いいたします。

平成24年度版同窓会会員名簿編集委員会
安部由美子（昭57卒、委員長）、福田利夫（昭51卒）、藤田欣一（昭56卒）、大山良雄（昭63卒）、菊地麻美（平７卒）、岩崎竜也（３年）、稲葉遥（３年）、小尾紀翔（２年）、関口淳一（事務局）、須田和花早（事務局）

学会報告（同窓会補助）

第47回日本病理学会関東支部会報告

病理診断学
教授　小山　徹也（昭59卒）

第47回日本病理学会関東支部会総会及び学術集会は去る平成22年６月12日、刀城会館で行われました。関東支部は平成10年に発足し病理学会の中で最大の会員数（1500名余）を有し、700名以上の病理専門医が所属し、24の大学病院（本院）を包括しています。東京病理集談会という解剖症例検討会では歴史のある会（昭和10年より開催）も今では支部学術集会の一部として含まれ、現在では年４回の支部会学術集会を開催しています。群馬大学では過去３回の東京病理集談会（昭和28年、昭和41年、昭和62年）と１回の支部会（平成13年、中島孝教授）開催経験があり、今回５回目ということになります。

群馬大学には志田・山中両名誉教授から現鈴木和弘教授にいたるまで、前立腺癌の診療・研究の長い伝統があります。また今回癌取り扱い規約（第４版）改定作業がほぼ完了しました。そこで、学術集会のテーマは「前立腺癌の病理診断」としました。特別講演は（１）第４版前立腺取り扱い規約について：臨床事項改訂のポイント（鈴木和弘群馬大学泌尿器科教授、規約委員会副委員長）（２）第４版前立腺取り扱い規約、病理改訂のポイント（坂本穆彦杏林大学教授、規約委員会、病理委員長）（３）取り扱い規約におけるGleason分類・前立腺癌と放射線治療（鷹橋浩幸慈恵会医科大学病理准教授、規約委員会、病理委員）を企画しました。前橋ということで、いかんせん東京から遠く参加者が少ないことが危惧されましたが、一般演題も５題集まり、120名以上の出席があり、ほっと胸をなでおろしました。規約改定に準じて、臓器別にテーマを作るという方式は、その後の関東支部会学術集会の恒例となっており、その意味でも斬新な発想であったと自負しています。最後に学会開催にあたって準備していただいた教室員、病理部教職員の皆様深く感謝し、資金援助をいただいた同窓会諸兄に厚く御礼申し上げます。

学会報告（同窓会補助）

第１回放射線神経生物学研究集会

神経薬理学
教授　白尾　智明（昭55卒）

この度、群馬大学医学部同窓会と文部科学省新学術領域「包括型脳科学研究推進支援ネットワーク（CBSN）」のご支援をいただき、平成23年１月29日（土）に刀城会館において第一回放射線神経生物学研究集会を開催いたしました。

本研究集会は、頭部の放射線暴露が中枢神経機能に及ぼす影響について問題意識を持つ放射線医療従事者と、放射線の作用を応用して脳機能を研究している神経科学者が一同に会し、血管内皮やグリア細胞や新生ニューロンの壊死による間接的機能障害のみならず、シナプス機能そのものに放射線がもたらす作用解明をも目指す「放射線神経生物学」という新たな研究領域の創出に繋がることを期待して開催しました。今回の開催では、特別講演演者１名を海外から御招待いたしました。そして全国からのシンポジスト８名をふくめて演題発表は45題にのぼり、60名以上の放射線生物・腫瘍学者と神経科学者が参加がしました。同窓会からは、昭和48年卒業の関東脳神経外科病院サイバーナイフセンター長・井上洋先生、昭和60年卒業の琉球大学脳神経外科教授石内勝吾先生にご講演いただきました。

シンポジウムでは基礎医学、臨床医学の双方の異なった立場からの議論がほどよくかみ合い、非常に活発なディスカッションとなりました。また、ポスター発表時間を２時間半と十二分に取ったため、若手の研究者同士のディスカッションや共同研究の試みなど，有意義な成果を得ることができました。この研究集会は原点をたどれば群馬大学の21世紀COEプログラム「加速器テクノロジーによる医学・生物学研究」による国際シンポジウムに遡ることができ、本研究集会企画当初より、国際的な学会の立ち上げを目指して開催いたしましたが、幸い本研究集会参加者を中心として、国際放射線神経生物学会を立ち上げることができました。同窓会の皆様方のご支援によりこの研究集会が成功裏に終了できましたことを、心より感謝申し上げます。

学会報告（同窓会補助）

環境ホルモン学会 第14回研究発表会

応用生理学
教授　鯉淵　典之（昭60卒）

平成23年12月１―２日にかけ、上記学会を大会実行委員長（本学会では大会主催者は「会長」ではなく「実行委員長」と呼びます）として開催しました。刀城クラブからのご援助のお陰で大盛会になりましたので、ここに報告させていただきます。なお、刀城クラブは本大会の「後援」団体ということにさせていただき、抄録集の表紙に名前を掲載致しました。

大会は東京大学山上会館を会場として開催しました。本来なら前橋で開催したかったのですが、昨今「環境ホルモン」ブームが去り、地方で実施したのでは参加者が少なくなるという意見が根強く、前回の理事会で私が大会実行委員長に推挙されたものの、東京開催を余儀なくされました。当初、演題登録が伸びず、参加者が少ない事が懸念されたのですが、当日の会場は立ち見が出る程の盛況で、胸をなでおろしました。

プログラムは、一般演題（口演およびポスター）以外にシンポジウム１つ、海外からの招待演者による特別講演、そして環境省による内分泌かく乱化学物質対策の取り組みを紹介してもらいました。シンポジウムでは「核内受容体と生体機能」というタイトルのもと、環境ホルモン（正式名称は「内分泌かく乱化学物質」）の主な標的である核内受容体の機能について、必ずしも環境について話さなくとも構わない、という事を予め連絡した上で、４人の先生方に最近の進歩を報告していただきました。そのうち１名は同窓生の山田正信先生（群馬大学病態制御内科講師）です。非常に内容の充実した、レベルの高いシンポジウムでした。また、招待講演ではDuke-NUSのPaul M. Yen教授による甲状腺ホルモンと脂肪肝形成との関係についての未発表データを提供していただきました。今後の我々の研究にもおおいに役立つ発表でした。さらに、環境省・環境安全課の本間政人氏から、今後の環境化学物質に対して、基盤的研究を推進しながら生体影響に関わる試験法を開発し、正しく評価するための枠組みを策定していく、との報告がありました。一般口演でも多くの質問があり、ポスター会場も熱気にあふれていました。以前の大会では、演題数は多いものの、発表の質は必ずしも高いとは言えず、また、学術研究と法的規制設定のための研究の違いも明確に区別できない研究者が多く、環境ホルモン研究に誤解を招く原因となっていました。日本でこの問題が顕在化して15年以上が経過し、研究水準もあがり、一時期の過剰な程の熱気が冷めて冷静な議論ができるようになったと感じた大会でした。

本大会の開催にあたり、刀城クラブからは過大なご援助を頂き大変感謝しております。本当にありがとうございました。今後の刀城クラブの益々のご発展をお祈り申し上げます。

学会報告（同窓会補助）

第２回国際放射線神経生物学会大会を開催して

分子細胞生物学
教授　石崎　泰樹（特別会員）

2011年12月３日、刀城会館にて第２回国際放射線神経生物学会大会（2nd Annual Meeting of the International Society of Radiation Neurobiology）を開催いたしました。

本学会は、放射線がもたらす神経前駆細胞・グリア細胞・血管内皮細胞へのダメージによる機能障害の解明のみならず、シナプス機能そのものにもたらす放射線作用の解明をも目指す放射線神経生物学という新たな研究領域の創出を目指し、本年１月に組織されたばかりの新しい学会です。その直後の３月11日に東日本大震災に見舞われ、福島第１原発事故により、大量の放射性物質が外部に飛散しました。事故がいつ収束するか未だ不確定であり、外部に漏出した放射性物質が我々の健康にどのような影響を与えるのか、多くの国民が不安に感じている状況です。このようなときこそ、放射線が健康に与える影響を客観的に評価する指標となる基礎的なデータを集めることが重要であると思います。本大会においては、放射線神経生物学の最前線で活躍する研究者が一同に介して、最新の成果を発表していただき、実りある討論を行うことができました。

特別講演として京大・放射線生物研究センターの小松賢志教授に「NBS1を中心とした放射線損傷応答の最近の進歩」と題して最新の研究成果をご発表いただきました。また基礎系シンポジウム「放射線暴露後神経機能障害のメカニズム」及び臨床系シンポジウム「機能的疾患の放射線外科治療」では各領域の最前線でご活躍されている先生方にご講演いただきました。さらにランチョンセミナーでは理化学研究所の渡辺恭良先生に「PET分子イメージング活用による創薬と先制医療の推進」と題して最先端の研究成果をお話しいただきました。一般演題も21題の意欲的な発表がありました。フロアからの質問・コメントも活発に行われ、熱いディスカッションも行われました。

この学会の開催直前に本学の「重粒子線医工学グローバルリーダー養成プログラム」が、文科省の博士課程教育リーディングプログラムに、申請101プログラム中で採択されたのはわずか21という狭き門を突破して採択されたという嬉しいニュースが飛び込んできました。群大はこの領域における研究者人材養成の世界的な拠点となることが期待されているわけです。本学会もその基盤となるべく努力していかなければなりません。刀城クラブから多大なご支援を賜り、本大会が成功裡に終わったことは、その第一歩と位置付けることができると思います。会長の森川昭廣先生をはじめとする同窓会の皆様に厚く御礼申し上げますと共に、刀城クラブの今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。

支部だより

刀城クラブ伊勢崎佐波支部 総会・忘年会報告

岡本　栄一（昭63卒）

平成23年12月１日（木）午後７時よりプリオパレス伊勢崎にて、恒例の支部総会と忘年会が開催されました。この数年、総会には母校より講師をお招きしており、平成20年と21年は同窓会会長（当時）の山中先生、森川先生、平成22年は腫瘍放射線学教授、中野先生にお越し頂きました。本年は病態総合外科学（第一外科）准教授の浅尾先生に「鏡視下手術の進歩と新展開」というテーマでご講演頂きました。従来開腹で行われていた様々な消化器外科手術を鏡視下で低侵襲かつ安全に行っている事、またこの進歩をささえる手術機器の改良・開発を浅尾先生自身が行っている事に一同大変感銘を受けました。講演終了後、外科系の先生を中心に活発な質疑応答がありました。

忘年会では会員の近況報告が行われ大いに盛り上がりました。出席者（敬称略、数字は卒業年）は写真前列左より：木村吉美（S49）、鈴木　豊（S47）、下條　宏（S42）、本多隆一（支部長、S44）、浅尾高行（S58）、岡本　榮（S30）、植竹　敏（副支部長、S46）、諏訪邦彦（S47）、草場輝雄（S47）、吉田寿春（S50）、後列左より：鈴木知明（S53）、新井正明（S61）、岡本栄一（S63）、田中司玄文（S59）、吉川大輔（S55）、塩島正之（S59）、南部眞一（S59）、荒巻哲夫（S62）、古作　望（S51）、田村卓彦（S63）、新田安紀芳（S55）、大林民幸（S57）、小内　亨（S59）、佐川鉄太郎（S63）、草別智行（H3）、写真には写られていませんが宇津木利雄（S52）、以上、26名でした。出席者の卒後平均年数33年と高年齢層にシフトしており、来年以降、若い会員の参加を期待して閉会しました。

伊勢崎佐波支部総会・忘年会（平成23年12月１日　プリオパレス伊勢崎）

神奈川支部同窓会報告

鈴木　仁一（昭57卒）

刀城クラブ神奈川支部平成23年度の総会が、平成24年１月28日に、総勢19名の参加を得て横浜市で開催された。昨年、石井英昭（昭和58年卒）から、支部長を鈴木仁一（昭和57年卒）が引き継いだ最初の総会であった。総会においては、例年、１月の第４土曜日に開催することになっていたが、次回は１カ月後の25年３月２日（土曜日）となることが案内された。また、神奈川支部の刀城クラブ有資格者でありながら、開催通知が行き渡らない会員の方もおられることから、来年度刀城クラブ本部事務局との連携について了解された。

懇親会において、古橋彰先生（昭和51年卒）の司会のもと、一番の年長の辻村啓先生（昭和24年卒）の乾杯のあいさつにより、懇談が開始された。卒業年次の若い人から、順次自己紹介を兼ねた近況報告

があり、和やかな雰囲気のもと、楽しい時間を過ごした。刀城クラブ神奈川支部総会・懇親会が、25年度の再会を期して終了した。

神奈川支部同窓会（平成24年１月28日）

クラス会だより

昭和39年卒クラス会報告

相川　英三（昭39卒）

恒例の39会は、昨年９月に十勝温泉で行われたクラス会（世話人：田中章二君）に於いて今年度は東京在住者が担当することに決まった。

卒業後47年になる今回の39会は、平成23年10月１日（土）に渋谷エクセルホテル東急で開催された。出席者は関東地方が主で、遠方からは村本卓郎君（金沢）と下山維敏君（秋田）が参加し、同伴者を含めて25名であった。

この一年の間に思いがけず他界された林映利君に哀悼の意を表し黙祷を捧げた。次いで、会の準備を担当した小原君の司会で、一般庶務報告後、三つの円卓を囲み懇親の宴が始まった。時間のたつのも忘れ賑やかに歓談が続き、宴も酣になったところで、来年のクラス会は村本君に世話人をお願いし金沢で再会することを約して一次会を閉めた。二次会はグループごとに渋谷の街に繰り出し、自由散会となった。（世話人：小原甲一郎、品川洋三、相川英三）

昭和39年卒クラス会（平成23年10月１日　渋谷エクセルホテル東急）

2011年度前橋医大３回生（昭和29年卒）クラス会報告

芹沢　憲一（昭29卒）

2011年11月13日、恒例のクラス会が、上野精養軒で行われました。昨年より３名増えて15名の出席でした。参考までに卒業時59名のクラスで、死亡28名。生存者31名中約半数の出席ということになります。

全員が後期高齢者でもあり、同伴介助者の出席を認めようと決めてから、初めて行野君が夫人と共に参加されました。夫人が前女の出身ということから、当時の前女のことなども話題となりました。

今回は、伊藤昇君が出席され、闘病生活の報告がありました。全員80歳過ぎというのに、参加者が増えてくるとは、素晴らしいことと思っています。久し振りに会うと、学生時代にかえって、話が弾みます。

全員が米寿を迎えるまでは、続けようということになりました。

2012年は11月11日（日）正午から場所は、上野公園内の上野精養軒です。幹事としては、次回は全員に、通知しようと思います。それでは、昭和29年卒の皆さん、お元気で…。

なお、昨年連絡がとれなかった須永君が、亡くなられたことが報告され、会が終わった直後、山田隆司君の訃報が入りました。（写真は松本俊雄君撮影）

昭和29年卒クラス会（平成23年11月13日　上野精養軒）

昭和32年　同窓会

柿沢　弘基（昭32卒）

平成23年10月15日土曜夕刻、構内の雑踏を抜け、新宿駅西口地下広場に出た。

曇天。都庁方面に向かう地下道をゆく。

還暦の頃、20年前、同じ会の会場として一度選ばれたことのある「京王プラザホテル」を目指す。二度目となる今回はアンケートの結果から「原則。日帰りの会」と決まった。

広い直線道路に似た地下道は、地上のビルと連絡できるよう機能的に造られていて、その都会的佇まいは20年前と変わっていない。

あの会の時、元気だった片田、須賀、中山、稲葉、梶原、布施、大高、牛久保などの折々の姿が思い浮かんでくる。近くは亀井、荒川が彼等の後を追った。

前回は49名の卒業生のうち半数以上が出席、盛会だった。これまでに仲間の約４割が欠けたことになる。残る31名のうち、今回は13名が集まる。出席予定だった石井、滝の２名が欠席となり、代わって紅三点のなか五十嵐（旧戸塚）、境野２女史が出席する。

１キロ程歩くと地下道の天井が途切れ地上の道路となる。周りは林立する高層ビルに囲まれている。左手に歩道に沿って建つホテルが見える。催し物の案内看板を横目に二重ガラス自動扉を通り抜ける。この階は地下に当たり、何軒かの飲食店やブチックが営業している。人影が絶えない。

次ページにつづく

待ち合わせ場所に予定していた入口近くの「樹林」という喫茶店に立寄り、予約を申し込んだ。「本日はすでに予約で満席」と断られた。

エスカレーターで３階にあがり、この階にあるロビーに出て、幹事の松本（渉外）、佐藤（会計）と合流。数少ないソファーのひとつを確保。ここを幹事の拠点とした。人影多し。

仲間の姿が現れる。笑顔、握手、挨拶、談笑。間もなく全員の顔が揃う。三三五五立談。

予約した６時が近づき、会場に移ろうとした。石橋の姿が見えない。手分けして周りを捜す。彼は宿泊予定。フロントから部屋に電話。応答なし。彼に宴席の情報を伝えていない。気がかりだが、仲間は一団となり宴席に移った。

宴席は「南園」という中華料理店。

黒いスーツと蝶ネクタイ姿の係員が奥の一室に案内してくれた。貴賓室のような、上品で落ち着きのある個室だ。

記念写真を撮り、席に着く。すでに用意されていたテーブルの上に料理とビールが運ばれる。

松本挨拶、境野女史の乾杯の音頭。開宴。

この時、石橋登場。「近況報告。ひとり３分。まず石橋から」と即決。

彼はそのまま直立。ワイシャツをたくし上げ素肌を露わにし、悲しげに叫んだ。

「見てくれ！このひどいヘルペスを。痛みに耐えかね、今まで部屋のベッドの上で休んでいた。イタイ、イタイ」

彼を皮切りに、それぞれ体調、仕事、家族、趣味、主張など手短に報告。

全員、充実した日を送っていることが伝わる。

生活保護、税制に対する批判、台頭する中国、迷走する国際情勢などについての意見、主張も開陳された。熱き批判精神、いまだ劣えず。

欠席理由の殆んどがそうであったように、エベレスト登山を報告した頑丈な佐藤を除けば、出席者全員、何らかの体調問題を抱えていた。いくつかは九死に一生という深刻な体験。

そんな闘病体験がまるで他人ごとのように面白可笑しく語られ、あたかも落語家の臨床講義といった印象。しかし気がつけば酒量も大分落ち、改めて、年齢のことを思わないわけにはいかなくなった。

ひとり松本を除き、全員ペースを落としてはいるが、仕事を続けている。ただ今「半端現役時代」を通過中。隠居するには未だすこし早い。

心なごむ、楽しい時間の過ぎるのは早い。

「来年あたりを最後とし、解散すべき時期に至ったのでは？」との提案あり。

「会存在に意義あり」「最後の２名になるまで」など賛否両論あり。

２回、評決を採り、２対11で存続と決定。

次期幹事は、堀内、武田が引き受けてくれた。決定時、大きな拍手あり。

８時半終宴。時間に余裕ある者は先程断られた喫茶店に席を移し、明るい灯のもと二次会を楽しむ。

９時半、再会を約し、なごりを惜しみつつ散会。帰路についた。

昭和32年卒同窓会（平成23年10月15日　京王プラザホテル）

35年ぶりの同窓

中村　　淳（昭44卒）

厳寒の前橋からベニヒガンザクラ満開の沖縄マラソン（沖縄市と嘉手納基地を走る標高差120mのタフなコース）に今年の２月夫婦で参加しました。翌日宜野湾市で開業している多和田健先生（昭和50年卒、産婦人科）に、約35年ぶりに再会し、親交を深めました。ひろみ奥様（昭50年卒、内科）も一緒に地域医療に貢献されています。休日は夫婦でゴルフを楽しんでおられるとのこと。新川唯彦先生（昭53年卒、産婦人科）もかけつけてくれ、お会いでき感激しました。先生は現在豊見城中央病院不妊センター長で活躍されています。

皆さん沖縄の風土のせいかもしれませんが、医局時代と全く変わらない穏やかな、のんびりした性格に、非常に楽しい時間を過ごさせて頂きました。日本一の長寿県、出生率の高い県の出産事情も知ることができました。おいしい沖縄料理と泡盛が前日のフルマラソンの疲れを癒してくれました。沖縄はたくさんの大会があるので、感謝の辞と再会を約束してきました。

左より中村、新川先生、ひろみ先生、多和田先生

お詫び

地域医療貢献賞受賞おめでとうございます

後列左から：梅枝定則先生、黛　卓爾先生
前列左から：八木秀明先生、村岡正治先生、斎藤弘一先生

前号（223号）の地域貢献賞受賞の写真の説明で前列右の斎藤弘一先生のお名前が間違って掲載されましたので、ここに本来の写真と説明を掲載いたします。斎藤弘一先生および関係の皆様にご迷惑をおかけしたことをお詫び致します。

医学部代表者及び新任教授との合同懇談会について

幹事長　**岡田　恭典**（平３卒）

毎年恒例となりました医学部同窓会、医学部代表者、新任教授との３者合同懇談会を２月16日（木）石井ホールにて開催しました。開催の趣旨は、群馬大学医学部同窓会・刀城クラブの活動（財団法人群馬健康医学振興会の活動）を代表者の先生方及び新任の教授の先生方にご理解いただき、群馬大学、医学部の諸活動の中で同窓会（財団）の役割等について意見交換することにあります。

合同懇談会には、群馬大学側から高田邦昭学長、和泉孝志医学系研究科長・医学部長、野島美久理事・病院長にもご参加いただきました。医学部新任教授は、富田治芳教授（細菌学）、対馬義人教授（放射線診断核医学）、大野達也教授（重粒子線医学センター）、近松一朗教授（耳鼻咽喉科・頭頸部外科学）、磯村寛樹教授（分子予防医学）の５名の先生方が出席され、同窓会からは、森川昭廣会長、西松輝高副会長、梅枝定則副会長、鯉淵典之役員、饗場庄一元会長、山中英壽（財）理事長、白倉賢二（財）常務理事、幹事長として岡田が出席いたしました。

合同懇談会では、まず森川会長から挨拶があり、続いて、高田学長、和泉医学部長、野島病院長から群馬大学及び医学部・附属病院の将来と展望についてのお話を聞くことができました。新任の教授の先生お一人お一人からは、医学部の教授としての豊富についてお話を伺うことができました。２時間という短い時間ではありましたが食事とお酒とともに会話も様々な方向へと盛り上がり、相互理解が大いに進んだ会にすることができました。

医学部代表者及び新任教授との懇談会（平成24年２月16日、石井ホール）

同窓会財政基盤強化協賛金 ご協力の御礼とお願い

財務委員長
梅枝　定則（昭46卒）

平成23年12月15日に発行しました会報223号にて協賛金のご協力をお願いいたしましたところ、多くの方にご賛同いただき誠にありがとうございました。

ご協賛いただきました皆様のお名前及び会計報告は、今後発行の同窓会会報に随時掲載させていただきご報告といたします。

同窓会の主な活動方針である「支部活動の充実支援」・「学術集会補助金支援」のみならず、今回は特に「刀城クラブ創立60周年記念事業支援」に充当させていただこうと思っております。

なお、前記の支援はこれからも継続していくものです。同窓会の財政基盤強化のために会員の皆様には今後とも変わらぬご厚情とご厚誼を賜りますようお願いすると共に、皆様方からいただきましたご協力に心より感謝と御礼を申し上げます。

皆様方のご健勝とご活躍を祈念しております。

同窓会財政基盤強化ご賛同者一覧　（平成24年３月15日現在）

卒　年	ご芳名（敬称略）
昭23卒	新井俊之
〃	庭地大
〃	馬場勇次
〃	早川勇
〃	増村雄二郎
昭24卒	大原義雄
〃	金子才十郎
〃	後藤敬子
〃	染谷守
昭25卒	大根田紳
〃	北島光二
〃	草間光一
〃	田所浪子
〃	田所春海
〃	松島敏
〃	松本文吾
〃	村本守司
昭26卒	吉津暁
昭27卒	神部重八洲
昭28卒	神岡芳雄
〃	矢野亨
〃	若尾哲夫
昭30卒	荒居龍雄
〃	小原沢孚
昭31卒	饗場庄一
〃	栗原憲雄
〃	齋藤三朗
〃	柴崎晋
〃	白倉卓夫
〃	鈴木政子
〃	深井登起子
〃	渡辺のり子
昭32卒	橋本隆
〃	堀内宏
〃	益田澄夫
昭33卒	片貝重之
〃	金子由之助
〃	田中英雄
〃	塚田穣
〃	中山欣司
〃	松本義明
〃	宮田敬一
昭34卒	青木國幸
〃	五十嵐俊弥
〃	浦野恭
〃	齋藤和子
〃	佐藤祐司
〃	高野晃寧
〃	橋本省三
〃	野上保治
〃	満川元亮
〃	乃木道男
昭35卒	伊吹令人
〃	鎌田慶市郎
〃	戸塚茂男
〃	新部英男
昭36卒	大竹誼長
〃	石川大二
〃	荻野晃一
〃	田島貞子
〃	田村多繪子
〃	田村宏
〃	吉住登
昭37卒	伊藤善一
〃	小林敏男
〃	佐藤豊明
〃	鈴木庄亮
〃	多島幹太郎
〃	馬場憲臣
〃	町田裕一
昭38卒	石山裕一
〃	川辺志津子
〃	塚越寛
〃	本木健雄
昭39卒	小原甲一郎
〃	加藤宣雄
〃	戸所正雄
〃	根本俊和
〃	村本卓郎
〃	山中英壽
昭40卒	飯塚益生
〃	小野敦美
〃	貝瀬宏
〃	小池脩夫
〃	清水哲也
〃	仁尾裕
〃	吉住幸子
昭41卒	牛島義雄
〃	荻原哲夫
〃	川上憲一
〃	窪田重美
〃	嵯峨六雄
〃	新開紘子

卒　年	ご芳名（敬称略）
〃	富所隆三
〃	宮良当益
〃	渡辺明
昭42卒	大川匡子
〃	春日功
〃	金井幸子
〃	鈴木忠
〃	露崎キヨ子
〃	長嶋和郎
〃	中林公正
〃	萩原正治
〃	松岡政紀
昭43卒	伊藤洋子
〃	駒井和子
〃	駒井實
〃	鶴野正基
〃	永井伊津夫
〃	野村満
〃	最上建治
昭44卒	大宣見綱夫
〃	岡林弘毅
〃	北浦宏一
〃	北村晴伸
〃	金城忠雄
〃	日下部和子
〃	日下部康明
〃	髙野裕
〃	田村勝
〃	布施嘉亮
〃	前田昇一
〃	森川昭廣
〃	柳川史忠
〃	柳川洋子
〃	山田邦子
〃	山田昇司
昭45卒	安藤公子
〃	都築靖
〃	福田均
〃	松村嘉夫
昭46卒	飯野佑一
〃	植竹敏
〃	梅枝定則
〃	神尾進之
〃	川辺昌道
昭47卒	田口修之
〃	宮石和夫
〃	森昌朋
〃	山門實
昭48卒	風間直久
〃	金子裕

卒　年	ご芳名（敬称略）
〃	高橋優四郎
〃	西松輝高
昭49卒	石塚文雄
〃	伊東孝治
〃	折原俊夫
〃	河合恭廣
〃	菅野倍志
〃	木村吉美
〃	西田保二
〃	本間哲夫
〃	矢崎克己
昭50卒	木村誠
〃	白倉賢二
昭51卒	提箸延幸
〃	田代雅彦
〃	玉那覇康一郎
〃	鶴田幸雄
〃	林陸郎
〃	古橋彰
〃	吉沢正夫
昭52卒	稲葉茂樹
〃	大澤英夫
〃	中屋光雄
〃	吉島哲也
昭53卒	上里博
〃	小野伸夫
〃	川島康宏
〃	草野元康
〃	佐原力三郎
〃	高山秀男
〃	平戸政史
〃	真鍋重夫
昭54卒	飯山三男
〃	石川浩
〃	浦部忠久
〃	岡本克実
〃	手塚誠
〃	長谷川義隆
〃	村瀬卓平
〃	渡辺秀臣
昭55卒	山中巳喜男
昭56卒	白石道雄
〃	瀧口道生
昭57卒	伊利元
〃	佐藤千鶴
〃	渡邊泰雄
昭58卒	志賀達哉
〃	田中良典
昭59卒	青木栄
〃	五十嵐恒雄

卒　年	ご芳名（敬称略）
〃	太田節雄
〃	小山徹也
〃	蒔田益次郎
〃	山田弘徳
昭60卒	鯉淵典之
〃	佐藤喜和
〃	清水信明
〃	塚越秀男
昭61卒	齋藤繁
〃	長瀬慈村
昭62卒	青木文夫
〃	小林夏木
〃	坂巻文雄
〃	笹本肇
〃	水間春夫
昭63卒	岡本栄一
〃	鈴木和浩
平元卒	小野芳啓
〃	時澤桂子
〃	羽鳥毅
平２卒	羽鳥基明
平３卒	大嶋明彦
〃	高尾昌明
〃	田口功
〃	武田將伸
平４卒	大嶋清宏
〃	喜納奈緒
〃	小林史明
〃	都丸裕美
〃	横尾英明
平５卒	岡田恭子
〃	尾岸浩一
〃	梶山浩
平６卒	塩之入千恵子
〃	鈴木裕子
〃	原哲也
平７卒	戸塚統
平８卒	堀口昇男
平10卒	岸田順子
平11卒	塚田昌大
平14卒	籾山幸
〃	山田博子
平20卒	浦部優子
〃	関根彰子

名誉会員　井上栄
特別会員　高岸憲二
　　星野洪郎
　　依藤宏
医療法人太陽会足利第一病院
社会福祉法人希望の家名誉理事長

太平義塾学生寮発足

代表　大川　　章（昭30卒）

私は群馬大学医学部一回生、同大学院の二回生です。伊豆下田の出身で、戦時中の極めて厳しい時期に中学を終了し、専ら陣地の構築や軍事教練に明け暮れ十分な勉強を受けられない状況下にあり、空襲や艦砲射撃、航空機からの機銃掃射を受け、更に台風や地震・津波の被害を毎年何回も受けるという毎日を送ってきました。戦争の空しさ、悲惨さも十分に体験してきました。目の前で戦争の空しさを目にして、平和の尊さを身にしみて感じました。戦争の厳しい生活、コペルニクス的価値観の転換、まことに目まぐるしい時を経験しました。

前橋に来た時は市街地は焼け野原となり、焼け残りの民家が点在し、赤城山周辺も台風の被害が点在し、食糧事情も悪く厳しい生活でした。但しそれでも伊豆より遥に安全で、住み易く感じました。街の復興に市民一丸となって取り組み、以前より立派な街となり交通も便利となりましたが、ここ10年前より不景気で街の衰退化が顕著になってきました。この間に後進国は大いに努力し、次々と日本を追い抜いていく状況下にあります。日本の教育も新興国に追いつき追い越されつつあります。このままでは日本が心配です。

21世紀を背おう若者が大きな希望と実行力を取り戻し日本だけではなく、世界の平和を希求して、大きな視野で地球全体の環境保全、自然体系、生物保護に努めるとともに人間間での争いをやめ各国の文化、宗教、経済等を尊重し友愛と寛容の精神で行動すべきでしょう。更に不屈の精神で正義を貫く若者を育成すべきです。又、一生涯を通じて人格の高揚を図り、人に尊敬される人間となる努力をすべきでしょう。

その意味で将来ある優秀な青年が共に学びあい、

励ましあい同じ場所で生活しながら、生涯無二の智として協力し合える仲間を作り、太い絆をもって共に努力し向上し合える友を作ってもらいたいと思います。

私の真の友人もこの年代の友が最も力になり頼りになる仲間でありました。大学１～２年は特に大切です。そこで私の全財産を投じて学生寮を計画しました。実は大震災の前に計画し、去年４月より発足の予定ではありましたが、準備が間に合わず一年延期せざるを得ませんでした。この大震災により多くの人々も、お互いの協力と硬い絆の大切さを自覚するようになってきました。ベストタイミングだと考えます。どうかこの寮を利用し、すばらしい人間形成の場とし、生涯の友を見出して下さい。

●学寮の内容

私のプレメディカル（医学進学課程）は東京の旧制高等学校の１つである成蹊から群大医学部へ進学したのです。私は全国から集った各新制大学生が寄宿する学寮を利用しました。この経験の良い点を取り入れ、時代の進化にも合わせ新形式の学寮を考えたのです。当時、そこには東大・一橋大・慶應・日大・早大・立教・成蹊・成城など有名な大学の学生が全国から集まってきました。それぞれの地域、それぞれの大学と広い範囲の有為の人物が自由に交流し生涯の友ができました。これは人生にとって大きな絆となり、力となったのです。私はその様な学寮を目指しています。その他に地域の知識人・有力者等の卓話を学べるように考えています。これは無料で、皆さんのために大いに役立つ有意義な話を楽しい雰囲気で聴き、自由に質問、討論できるように心掛けるつもりです。その他の細かい点は是非現場をご覧になって下さい。

▲２Ｆ・３Ｆ廊下

連絡先

〒371-0033
群馬県前橋市国領町1-15-15
TEL 027-233-3656（学寮）
TEL 027-233-6990（大川自宅）
Email info@taiheigijuku.com
HP http://taiheigijuku.com/user.php

居室（南東）▶

≪事務局より≫

太平義塾は、１カ月４万円の室料で、朝・夕の食費は１カ月３万円とのことです。

役員会だより

第９回役員会（平成23年11月24日）

出席者　森川会長　他16名　学友会５名
報告事項
１．法人のその後の活動について
２．その他
協議事項
１．名簿編集委員会委員長の選任について
２．医学部代表者及び新任教授との懇談会準備について
３．刀城クラブ及び財団法人のホームページのブラッシュアップについて
４．その他

第10回役員会（平成23年12月15日）

出席者　森川会長　他15名　学友会７名
報告事項
１．法人のその後の活動について
２．「同窓会総会、教授の会」、「刀城クラブ創設60周年記念祝賀会、一般財団への移行お披露目会」の日程について
３．その他
協議事項
１．会員名簿編集委員会の編成（案）について
２．その他
　１）会報編集状況について

第１回役員会（平成24年１月26日）

出席者　森川会長　他17名　学友会６名
報告事項
１．法人のその後の活動について
２．その他
協議事項
１．群馬大学重粒子線治療基金について
２．平成24年３月卒業生に対する記念品について
３．卒業時同窓会表彰学生の選考について
４．交換学生奨学補助金について
５．名簿編集状況について
６．会報編集状況について
７．その他

学内人事

【昇任】平成24年４月１日
山田　正信（昭58卒）病態制御内科学准教授
高橋　克昌（平６卒）耳鼻咽喉科・頭頸部外科学准教授
登坂　雅彦（平５卒）脳神経外科講師

【採用】平成24年４月１日
亀田　高志（平６卒）産科婦人科講師

学外人事

【就任】平成24年４月１日
大橋　京一（昭49卒）大分大学医学部長
同大大学院医学系研究科長

謹　告

ご逝去の報が同窓会事務局に入りました。
ここに謹んでご冥福をお祈りいたします。

正会員
昭和29年卒　須永　勇先生（平成 22年12月14日逝去）
昭和35年卒　安田　一先生（平成 23年10月25日逝去）
昭和38年卒　塙　　博先生（平成 23年11月19日逝去）
昭和49年卒　宮久保寛先生（平成 24年１月14日逝去）
昭和26年卒　豊田　勲先生（平成 24年１月17日逝去）

名誉会員
松本清一先生（平成23年12月15日逝去）

特別会員
遠山　博先生（平成22年11月26日逝去）

編集後記

12年前に初めて担当した編集後記がこの時期の会報だったと記憶しております。もう一つ記憶ちがいでなければ、プロ野球オリックスのイチローが大リーグに挑戦して活躍した年でもありました。奇しくも今年日本で大リーグの開幕戦が行われ、そこにイチローも参加していたことはなにかの縁でしょうか。

卒業生の皆様、ご卒業おめでとうございます。最終学年になる年に経験した未曾有の大震災と福島原発事故は、皆様がこれから医療人としてどう働いていくか考えさせられる大きな出来事ではなかったかと思います。さて今号には支部だよりが２通とたくさんのクラス会だよりもいただきました。「まだまだ若いものには負けない」と生き生きした大先輩方の写真が掲載されています。がんばれ日本。

（藤田欣一）

編集委員　福田利夫(昭51卒)、平戸政史(昭53卒)、萩原治夫(昭56卒)、藤田欣一(昭56卒)、安部由美子(昭57卒)、大山良雄(昭63卒)、星野綾美(平13卒)、宮永朋実(平15卒)、岩崎竜也(3年)、稲葉遥(3年)、書上奏(3年)、小尾紀翔(2年)、関口淳一(事務局)、須田和花早(事務局)